

令和4年度学内公募研究（地域連携型）
〔研究紹介〕

地技の再評価のための生業場とコモンプレイスの
連携・創出に関する実践的研究

大沼 正寛¹⁾, 岸本 誠司¹⁾, 中村 琢巳²⁾, 佐藤 飛鳥³⁾,
阿部 正⁴⁾, 田澤 紘子⁵⁾, 宮本 愛⁶⁾, 渡邊 武海⁷⁾

Practical Study on Alignment and Co-creation of Regional Work and Common
Place for Reevaluations of Local Technique of Livelihoods

Masahiro ONUMA¹⁾, Seiji KISHIMOTO¹⁾, Takumi NAKAMURA²⁾, Asuka SATO³⁾,
Tadashi ABE⁴⁾, Hiroko TAZAWA⁵⁾, Ai MIYAMOTO⁶⁾, Takemi WATANABE⁷⁾

Abstract

This research aimed to advance practical research on creating places to think about how to pass on the livelihood landscapes to the next generation, and to consider the recording, preservation, and utilization conservation of tangible and intangible heritages, which is in decline. This has been put into practice in 9 cases, and we have been able to actively promote collaboration and co-creation with the local communities.

1 はじめに

筆者ら生業景デザイン研究所では、地域の資源・環境を活かして価値を生み出す技術や技能を「地技」と呼び、地技を活かした東北各地の生業景に着目して事例調査・比較研究

-
- 1) ライフデザイン学部 生活デザイン学科 教授
Professor, Faculty of Life Design
 - 2) 建築学部 建築学科 准教授
Associate Professor, Faculty of Architecture
 - 3) ライフデザイン学部 経営コミュニケーション学科 准教授
Assoc. Prof., Faculty of Life Design
 - 4) ノーマルデザインアソシエイツ代表
Architect, Normal Design Associates
 - 5) 東北芸術工科大学 デザイン工学部 専任講師
Lecturer, Tohoku Univ. of Art and Design
 - 6) NPOつながりデザインセンター事務局長
Secretary General, NPO TSUNAGARI Design Center
 - 7) 有限責任事業組合メディアストラータ代表
Representative & Designer, Media Strata

を重ねるとともに、減少しつつある建築遺産の調査・保存・活用に関する実践的研究を進めてきている。このとき、必ずしも伝統的旧来的なものを維持するだけでなく、むしろ高度情報化社会が進むほど環境的身体的な地技の重要性が再評価されてくる可能性を念頭においていることはいうまでもない。ただ、それらの調査対象は衰退しつつあるものも多く、得られた知見を総括する前に、存続や活用を検討せざるを得ない状況も少なくない。

そこで本研究では、人・知・技を持ちより、共創につなげる場（機会）を「コモンプレイス」と呼び、地技に関わる知見を持ちより、次世代へどうつなげ、活かしていくかを考える場－生業場とコモンプレイス－の連携・創出について実践的研究を併行展開することで、衰退しつつある有形無形遺産の記録・保存と活用保全にかかる考察を行い、今後活かせる知見を得ることをめざした。具体的には、命題をもとに演繹的に事例を探索調査するのではなく、これまで継続してきた東北各地における地域連携プロジェクトを継続・再定置する(全9件)。生業への着目から情報を持ちよる場としてのコモンプレイス論を考え、あるいは、元から存在し一定程度開かれた空間・場をコモンプレイスと見立てる。すなわち、現状に至るまでの建築史的検討と、現状から未来に向けての考現学的デザイン論を、参画学生とともに複眼的に考察するものである。

2 地域連携プロジェクトの再定置と併行実施

本研究は、生業景デザイン研究所の前身となった研究開発プロジェクトⁱ⁾ ⁱⁱ⁾ や科学研究費助成研究ⁱⁱⁱ⁾、前年度までの学内公募研究などをふまえて構築された地域連携プロジェクトを基盤としている。ここでは「食・住にかかる生業場とコモンプレイス」「工芸・アートをいかしたコモンプレイス」「建築遺産の活用保全とコモンプレイスとしての可能性」の3節に大別して関わりの深い実践プロジェクトを紹介し、それぞれにおける今年度に進めたことを報じ、それらをもとに各節の小括を行う。

2.1 食・住にかかる生業場とコモンプレイス

表1に、本節で採り上げた地域連携調査研究事例(①～③)の概略を示す。

(1) 事例① 東北各地の干し場と生業景－凍み大根への着目－

寒冷な東北の気候風土を活かした「寒風の干し場」に着目し、各地の生業場を視察・比較考察した。これまで、宮城県大崎市岩出山の凍み豆腐などに関心を寄せてきたが、今年度は秋田県大仙市の伝統的な在来大根によるいぶりがっこ(写真1)、新潟県村上市の塩引き鮭(写真2)、丸森町のへそ大根(写真3)や岩手県西和賀町の凍み大根などを取材した。凍み大根の生業場は、根菜を、冷涼気候を活かして保存食とする点において、当地方の特徴がもっとも現れたものの一つと考えられ、生業場に関心をよせる大学院生の修士研修にも活かすこととした。毎年一定の時期に進められる凍み大根の生業場そのものを空間的に明らかにするとともに、それが景としてどのように立ち現れてきたのか、どのように存続しうるのかを考察し、小稿にまとめていくこととした。

(2) 事例② 生業景をめぐる人々の動き－大崎市を中心に－

大崎市岩出山では、よっちゃん農場や東北の食材ブランディングで躍進するBLUE FARM社ら、これまでの農業・食品業の枠組みをこえた共創的動きがみられることから、筆者らは前身研究にて「インナーダイバーシティ(域内多業種)型コアトリエ」と仮称し

て、その主要プレイヤーらとの情報交換を続けてきた。とくに「よっちゃん農場」については、ライフデザイン学部生活デザイン学科の学外企画「SDウィーク・オープンセミナー（生活文化編）」で講話いただき（写真4）、「食材・食品生産に従事することの目標像には我が村そのものの風景を美しく保ち続けていくことが中核にある」という重要な指摘がなされ、一連の研究にかかわる課題意識を再確認することができた。加えて、2022年12月には大崎市の景観講演会で講演を担当し、生業景デザインの考え方を発信する機会を得た。

表1 食・住にかかる生業場とコモンプレイスに関わる3つの実践プロジェクト概要

	① 東北各地の干し場と生業景	② 生業景をめぐる人々の動き	③ 石材産業と「住」がつくる景観
調査・活動概要	保存食の生業景は全国にあるが、東北地方に特有のものとして、資源豊富なもの（鮭など）、独特な製法（燻り）、凍みることを念頭に置いたもの（凍み豆腐／大根）などの一次調査を行い、詳細調査の対象事例を絞り込んでいく。	凍み豆腐の名産地である大崎市岩出山町を中心に、農業・食品加工とともに最新のブランディング・デザイン（インナー・ダイバーシティ型コアトリエ）が進む。それらの動きや当事者の声を聴き、生業景の将来像を考察する。	港町の商業集積と塩竈神社の門前、東北本線の延伸拠点などが重なり、海に迫る丘陵を開発、市街化。そこで産した石材が域外だけでなく地場でも石蔵・石堀などに用いられ、港町を支える生業景、住宅など生活景に至った近代史を考察。
連携地域団体等	【調査】M1 吉田陽菜子・大沼正寛・岸本誠司ほか 【協力（敬称略）】田口康平（大仙）／庄司一郎・上野美樹（丸森）／中村一美・加藤紗栄（西和賀）ほか	【調査】B4 細浦大夢・大沼正寛・岸本誠司・渡邊武海ほか 【協力（敬称略）】高橋博之（よっちゃん農場）／早坂正年・高橋雄一郎（BLUE FARM）ほか	【企画・実施】中村琢巳および中村研究室・B3 矢崎茉莉・大沼正寛ほか 【協力（敬称略）】NPO みなとしほがま（大和田庄治・高橋幸三郎・三浦一泰ほか）
成果報告等	【制作発表】吉田陽菜子・島山雄豪・大沼正寛：呼応する一うろしとまちがつながる日常；2022年度日本建築学会大会建築デザイン発表会梗概集 14057, pp114-115, 2022.7（次年度に「干し場」の調査内容を投稿済）	【公開】SDウィーク・オープンセミナー生活文化編「地味と風景」, 2022.8.5 【講演】大沼正寛「景を守り、造り、育てる—大崎の生業景と建築—」令和4年度大崎市景観講演会, 2022.12.6	【公開】NPO みなとしほがま「塩竈の歴史文化を生かしたまちづくりワークショップ」第1回＝中村 2022.12.17 / 第3回＝大沼 2023.3.25（次年度に矢崎が日本建築学会大会論文投稿済） 【報道】河北新報 2023.5.18 朝刊



写真1
伝統的いぶりがっこの生業場



写真2
村上市・塩引き鮭の干し場



写真3
丸森町のへそ大根の干し場



写真4
SDウィークY農場の講話



写真5
塩竈石の建物が残る町並み



写真6
塩竈まちづくりワークショップ

(3) 事例③ 石材産業と「住」がつくる景観 —塩竈石の町並み—

塩竈市において、数多く残る文化財等を相互に結びつけながら保存活用を図る地域計画の検討が進められており、筆者らは調査部会（建築部門）の委員を務めている。なかでも、かつて隆盛した塩竈石の地技・生産技術史は旧市街各地の住まい・まちなみに遺されていることから、これに関心をよせる研究室学生の研修を主軸に調査研究を進めていくこととした（写真5）。本件は別途、共著中村が進める学内公募研究およびNPOみなとしほがまの活動と連動し、歴史をいかしたまちづくりワークショップにおいて相互協力することとなり、登録文化財建造物を利用した発表会（写真6）は地元紙に掲載された。

(4) 食・住にかかる生業景とコモンプレイスについての小括

生業は地場に根ざし、地場が生業を生んでいるともいえる。そのように地場に根を下ろした「食・住にかかる生業景」に関心をよせるならば、本来的には消費者・ユーザーにも「現地訪問」を通してその景を理解することが求められる。いっぽうユーザーの視点にたてば「メディア情報の共有」によって代替されるほうが合理的であるものの、そこに環境循環などのエシカルな視点を得るには限界もある。その意味で、(2)(3)に示したオープンセミナーやワークショップは、生産者自身もしくは地元市民を話者とし、地技に関わるB to Cのコモンプレイスにかんする一定の素描となった面がある。また(2)に示した、地域の生業場を結びつけながらその価値をブランディングに高めようというBLUE FARM社のとりくみは、実際に生産者同士を結びつけた商品開発を行いながら、地域のプロデューサー、クリエイターを創出する点において、創造的・研究開発的なB to Bのコモンプレイスの一様態とも評価することができるだろう。

2.2 工芸・アートをいかしたコモンプレイス

表2に、本節で採り上げた地域連携調査研究事例（④～⑥）の概略を示す。

(1) 事例④ 丸森・アート資源と空き校舎

宮城県丸森町では令和4（2022）年度より、8校のうち6校の小学校が廃校となり2校に統合された。その後の利活用について関心を示した学生とともに地元との談義を重ね、卒業研修を通して新たなコモンプレイスの創出について考える機会を得た。具体的テーマとして採り上げたのは大張小学校、筆甫小学校である。前者は世界的彫刻家・佐藤忠良の父方の実家がある地域で、同町が別途、宮城を代表する超現実主義画家・宮城輝夫のコレクション保有していることに鑑み、一種の美術館構想を提案する活動として進めた（写真7）。同地区では養蚕が現在も残るとともに、高級石材「伊達冠石」を産してきた大蔵山や、熟成肉の生産・卸しを中心に進めながらフレンチシェフとしても腕を振るう古民家レストランなど（写真8）、コンテンツと寄り合い空間の双方が資源として多くある。また後者の筆甫地区も、林業家の多彩な活動や古民家をいかした旅の宿など、同様なポテンシャルがある。こうした点が複数の大学院生や学生が研修テーマの対象地とすることが叶い、2023年2月22日には大張まちづくりセンターで報告会を開催（写真9）、河北新報紙に掲載された。次年度も複数学生が継続研究の予定である。

(2) 事例⑤ 加美・工芸をめぐる民家再生案

令和3（2021）年度の学内公募研究が契機の一つとなり、再生活用プロジェクトに参画したギャラリー・工芸藍學舎。筆者らが協力したのは同ギャラリーの下屋部分に葺いた天

然スレート屋根であり、当該年度は希少となった屋根葺き技術を後世に伝える「石盤葺ハンドブック」を上梓したところでもあった。今年度はこれに続き、ギャラリー再生前の建築史(昭和5年創建当初は醤油蔵)について、日本建築学会東北支部への研究報告を行うとともに、中新田に伝わる宮城県指定無形民俗文化財「中新田の虎舞」(写真10)の舞台となっている山和酒造の旧店蔵・主屋等を有効活用する構想を提案(写真11)、生活デザイン学科代表作品(SD賞)、日本建築学会卒業制作展出品作品に選出された。

表2 工芸・アートをいかしたコモンプレイスに関わる3つの実践プロジェクト概要

	④ 丸森・アート資源と空き校舎	⑤ 加美・工芸をめぐる民家再生案	⑥ 日本庭園の近現代意匠史
調査・活動概要	元来、伊達冠石や養蚕、棚田などの地域資源が豊富なうえ、世界的彫刻家・佐藤忠良の父方実家がある大張地区に着目し、丸森町が所蔵する宮城輝夫作品を活かした空き校舎活用構想を提案。ほかに旧筆甫小などでも考察を行う。	加美町中新田で染織家として活動する笠原氏の工芸ギャラリーに天然スレートを利用。これを契機として、同施設の旧状を建築史的に検討。また無形文化を伝える町の中心施設(空き古民家)の新たな再生提案を卒研にて行った。	アートや工芸は室内に留まるものではない。とくに庭園芸術は量産不可でアートの色合いが強い。昭和を代表する作庭家・重森三玲のもとで学んだ作庭家が手がけた寺院日本庭園を視察し、デザイン技法を学び伝承していく。
連携地域団体等	【調査】B4 高平真衣・B4 細浦大夢・B3 鈴木来美・B3 阿部日菜子・田澤紘子・宮本愛・大沼正寛ほか 【協力(敬称略)】丸森町教委・大張まちづくりセンター・大張地区自治会／上野美樹・佐藤光郎(丸森)ほか	【調査】B4 黒井唯花・B4 小山結菜・阿部正・岸本誠司・大沼正寛ほか 【協力(敬称略)】笠原博司(工芸藍學舎)／伊藤智幹(山和酒造)ほか	【視察調査】M1 新嘉偉・大沼正寛ほか 【協力(敬称略)】小山雅久(作庭家)・大宮司慎一(當来山龍華院・宮城県大和町)
成果報告等	【地域報告】丸森卒研報告会&廃校活用勉強会@大張まちづくりセンター, 2022.2.22 【報道】河北新報「廃校活用 丸森に美術館を一東北工大生 卒業研究の活性化策発表」2023.3.14 朝刊	【研究発表】黒井唯花・大沼正寛: 宮城県加美町工芸藍學舎・醸造蔵の変容プロセス; 2022 年度日本建築学会東北支部研究報告集(計画系) 第85巻, pp69-70, 2022.6	(次年度に向けて新嘉偉らが実測調査を重ね、日本建築学会大会論文を投稿済)



写真7
空き校舎となった旧大張小



写真8
熟成肉も作る仏レストラン



写真9
大張にて卒研報告会



写真10
虎舞いの舞台となる「寅や」



写真11
「寅や」の再生提案でSD賞



写真12
重森小山流の日本庭園例

(3) 事例⑥ 日本庭園の近現代意匠史

日本庭園の作庭法には長い歴史と多様な系統・流派があるが、戦後もっとも活躍した作庭家に重森三玲（1896-1975）がいる。その門下で宮城県出身の小山雅久氏が手がけた庭園を視察し、小山氏自身に構想内容をヒアリングする機会に恵まれた。代表作に黒川郡大和町東部に存する當来山龍華院庭園がある。禅宗系の仏教思想を根本に置きながら、建築との関係、旧来の木立を活かし、枯山水庭園から回遊式庭園（写真12）までを配した分散型の構成が見事であり、あらゆる石材に役を与える地場石材の活用手法も興味深い。この研究は、大学院生・靳嘉偉（ジンジャウエイ）氏が修士論文のテーマに据え、取り組んでいくこととなった。

(4) 工芸・アートをいかしたコモンプレイスについての小括

ここに挙げた3例は、空き校舎や空き家の利活用に着眼したもので、屋外空間に着目したものである。場を舞台に見立てたとき、そこにどのような創意工夫をもった役者をコンテンツとして配役できるかが問われるが、このことは人々の交流・共創を促すコモンプレイスづくりにも当てはまる。このとき、素材や技法などの点において地域性や環境循環性を関連づけ、鑑賞者に「生業景のつながり」を想起させることができるかが要点となる。ことに、工芸やアートは地域内での習得鍛錬だけでは不十分なことが多いため、域内培養の地技に収まるものとは考えにくい。そうした技が地元素材と出会うとき、地技に類する技法が育まれる可能性があるといえる。

2.3 建築遺産の活用保全とコモンプレイスとしての可能性

表3に、本節で採り上げた地域連携調査研究事例（⑦～⑨）の概略を示す。

(1) 登米南方・寺院遺産の修復保全 —大嶽山興福寺書院及び庫裏—

登米市の大嶽山興福寺（写真13）は、修験霊場として開かれた寺院であるが、「稚児（ちご）行列」が行われる大嶽山春まつりなど、宗教空間のみならずのどかな地域の拠り所として市民に愛されてきた。2021年度卒業研修（高橋亜美氏「ブックロジ南方」）において実測調査と再生活用提案を行ったことをきっかけに、2021年3月宮城県沖地震、翌年3月福島県沖地震と2回の震災損傷を受けた「書院及び庫裏」の修復保全について相談を受けることとなった。その後、調査研究としての関与から一歩進み、大嶽山興福寺より奨学寄付金を受けて、檀家・信徒らへのアンケート調査、修復保全計画の策定協力に携わることとなった。

(2) 金ヶ崎六原・近代遺産活用提案 —国登録有形文化財・軍馬の郷資料館—

金ヶ崎町六原はかつて、軍馬の生産・調教が行われ、官舎が建てられたのち青年道場として再生されるなど、地域史を色濃く刻む。ここに、音楽をテーマとした利活用に資する構想を学生・小山結葉氏が卒業研修として発案したところ、戦後には実際に小さな音楽堂があったことも判明した。若者にとってのコモンプレイスは今も昔も、夢や希望、楽しみが不可欠である。今回は時代を超えた感性の呼応が興味深く、2023年3月3日に金ヶ崎町伝統的建造物群保存地区内の坂本家住宅で発表会を行ったところ、その模様は岩手日日新聞、胆江日日新聞の2紙に大きく採り上げられた（写真14）。

(3) 柴田成田・生業生活遺産調査 一木と石をめぐる地技企業の住環境史一

宮城県柴田町成田坂元・サカモトの家は、所有山林を活かした林業に始まり、建設業、関連産業を営むいわば地技を活かした総合企業として名高く、環境保全等の点でも評価されている。著書「風景資本論」で知られるランドスケープデザイナー・廣瀬俊介氏らが、旧家の周辺の生態系調査を含めた丁寧な環境整備を進めていることも着目される。一方、同家の住宅は「東北の民家」を著した小倉強が昭和30年代に設計を手がけ、周辺には明治大正期と目される石蔵等の建物も多く、地元の凝灰岩・富沢石と、地元の花崗岩・成田石が多用されている貴重な建築遺産である。これらの生業遺産、生活遺産の複合物件の建築史的解明はその後の活用保全の基盤となることから、少しずつ調査研究を進めていくこととしたものである。

(4) 建築遺産の活用保全とコモンプレイスとしての可能性についての小括

ここに挙げた3例は、活用方法の内容は限定的であり、むしろ純粋な修復保全を旨とするものや、基盤となる建築史的検討を行うものである。寺院、官舎、近代和風住宅と、それぞれの成り立ちや用途は異なるものの、つよい個性を有し造形意匠や素材そのものに

表3 建築遺産の活用保全とコモンプレイスとしての可能性に関わる3つの実践プロジェクト概要

	⑦ 登米南方・寺院遺産の修復保全	⑧ 金ヶ崎六原・近代遺産活用提案	⑨ 柴田成田・生業生活遺産調査
調査・活動概要	登米市指定文化財である観音堂や六角堂をもつ興福寺において、地域のコモンプレイスとなっている登録文化財・書院及び庫裏が地震で損傷を受け修復保全が望まれていることから協力。利活用の可能性を探りつつ検討を重ねる。	金ヶ崎町六原にはかつて旧陸軍軍馬補充部六原支部が設置、当時の官舎が国登録文化財となるも、1棟のみが資料館となるに留まっている。軍施設ののち六原道場、農場だった時期に音楽堂があった歴史をもとに学生の活用案を提示。	柴田郡柴田町にて林業・建設業などを営む旧家は、かつて富沢石および成田石の生産販売を手がけたほか、当家の主屋の設計は「東北の民家」著者の小倉強が手がけるなど、生業・生活史ともにエピソードが深く、研究を深めていく。
連携地域団体等	【調査】B4 細浦大夢・B4 芳賀悠太・B3 浦野大地・岸本誠司・大沼正寛 【協力（敬称略）】嶽内真弘・嶽内慶之（大嶽山興福寺住職）／興福寺檀家・信徒関係者／R03-B4 高橋亜美ほか	【視察調査】B4 小山結菜・B4 黒井唯花・大沼正寛 【協力（敬称略）】千葉周秋（民俗研究家）／千葉睦夫（金ヶ崎町）／岩隈大樹（いと・をかし）ほか	【視察調査】B3 佐藤慧・B3 鈴木翔・大沼正寛 【協力（敬称略）】大沼毅彦（柴田町）／斎藤広通（近代仙台研究会事務局長）ほか
成果報告等	【奨学寄附】大嶽山興福寺 2022.11 【研究発表】細浦大夢・大沼正寛：登米市南方町大嶽山興福寺の文化資産と活用管理コミュニティ；2022年度日本建築学会東北支部研究報告集（計画系）第85巻，pp71-72, 2022.6	【研究発表】小山結菜・大沼正寛：宮城県美術館の現地存続運動にみる多様な価値対象；2022年度日本建築学会東北支部研究報告集（計画系）第85巻，pp75-76, 2022.6 【報道】岩手日日新聞，胆江日日新聞，2023.3.4 朝刊	（次年度に向けて、佐藤慧・鈴木翔が卒業研修を通しての調査研究を検討）



写真13
国登録・大嶽山興福寺書院



写真14
金ヶ崎六原原宿所の提案

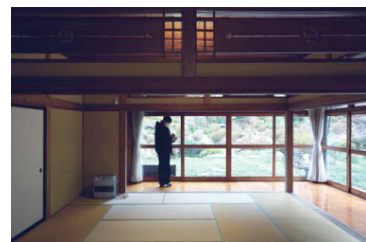


写真15
小倉強設計の近代和風住宅

も地技や地域性が認められることは多い。他方、それがコモンプレイスとして活かされるためには、別の発想や機会を付与する必要があることはいうまでもない。

3 考察と結びーコモンプレイスの連携・創出ー

以上、地技の再評価のための生業場とコモンプレイスの連携・創出について、東北各地におけるこれまでの情報網・人脈、生業景デザイン研究所に寄せられた相談情報を活かして、その可能性を参画学生とともに探った。その結果、主なものだけでも上記のように9件に及び、いずれも地域との連携・共創を活発に進めることができたことから、本稿ではその一端を紹介した。

本稿の意図するところは生業景とコモンプレイスの連携・創出である。生業景だけに着目したままその価値を誰にも共有せず消失させていくことは良くないし、コモンプレイス(にぎわいなど)だけを重視して地域らしい生業景が軽視されることも良くない。その相補的な目標を叶えようとすることは、SDGsにもつながると信じたい。

数多くの地域事例を羅列した印象を与えかねない点があることは課題であり、本稿では内容面から3節に分け、相互比較ができるよう検討した。今後とも関連研究を継続しながら、より高次の学術的知見が得られるよう努力したい。

謝 辞

本研究の遂行にあたっては、本文中の表1～表3に記した欄内の方々をはじめ、各地域の方々に大変お世話になった。ここに記して謝意を述べたい。

参考文献・初出等

- i) 科学技術振興機構社会技術研究開発センター「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成」(研究代表者:大沼正寛, 2016-19)
 - ii) 科学技術振興機構・社会技術研究開発センター「多世代共創ハンドブック」2021.3
 - iii) 大沼正寛:ルーラルワークプレイスの基礎的研究ーその近現代史と活用保全の要件;独立行政法人日本学術振興会研究開発事業基盤研究(C)(一般)19K04773, 2019.5-2023.3
- その他の関係論文等は、表1～表3中に記載している